



## 最新 宇宙学—研究者たちの夢と戦い—

栗野諭美・福江 純共編

裳華房 (ポピュラー・サイエンス・シリーズ 261),  
229 頁, 本体 2,000 円

解説書

お薦め度

☆☆☆☆★

日本語で書かれたこれだけの量のものを、久しぶりに一気に読み通してしまいました。トシをとりますと、いろいろな理由から一気読みが難しくなるのです。おまけに実は浦島太郎状態でもあることを、この本を読みながら痛感しました。どこが浦島か？日本の気鋭の研究者の方々が多方面で活躍なさっていることに、驚いたからです。

全体が3部構成で、まず「太陽系と宇宙人」、次に「星とブラックホール」、最後に「宇宙と銀河」、そしてそれぞれ3ないし5章からなっています。取り上げられているトピックとしては、ブラックホールや宇宙の始まり、といった定番人気商品もありますが、多様な系外惑星の発見やプロブリッドや重力レンズは新人王、かな。

さてこの本にこれだけとらわれた理由は？執筆者の情熱が伝わってくるからです。もともと原稿依頼をした方の熱心な働きかけがあってこそそのものでしょう。ある程度基本的な物理の説明も添えられていますから、実は大学の教養部の講義に使えるほどの内容です。本のタイトルの「学」の添字が本当に生きています。これぐらい熱の入った講義であれば、必ずや人気があるでしょうから、天文分野に関心や共感を持つ方々が増えること必定です。

すみません、ヨコミチに逸れました。天文観測の技術的な側面に関する記述も随所にありますの

で、技術者の方々にとっても面白いのではないのでしょうか。

引用の仕方や、外国の機関・人名の表記に一貫性がないのは、複数の執筆者がいるために仕方がないと思います。が、3部構成各部についての導入が欲しかったように感じます。戦況の全容が概観できるといい。もちろん戦況分析は、編者の好みに偏って構いません。それなりに日本の天文研究コミュニティの傾向が現れてきて、次の世代の研究者陣を呼び込むことができるのではないのでしょうか。

さて唯一にして最大の不満。実は副題にある「研究者たちの……戦い」がもっと生臭い形で描かれているかと期待したのですが、ところどころ露呈する悔しさやヤツタゼの感慨に共感を覚えるものの、全体としては物足りない。解説書としての性格上、卒のない処理になるのは仕方がないのでしょうか。読者の皆さんには、ぜひ行間にある焦りを感じ取っていただきたいものです。真理に迫ろうともがいている姿とともに、研究者も社会の中の人間ですから、業界の競争の中で自分が立ち遅れているのではないかという恐れもあるわけですから。謙虚さを伴ったこのような危惧が、研究の新たな発展の原動力の一部となりますように。

林 左絵子 (国立天文台)